HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	カナダのイメージ ： 異文化接触としての姉妹都市関係の視点より(I)
著者	井上，真蔵
引用	北海学園大学人文論集，9：71-100
発行日	1997-10-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

カナダのイメージ
── 異文化接触としての姉妹都市関係の視点より ──（Ⅰ）

井　上　真　蔵

Ⅰ．はじめに

「カナダで自分発見しませんか。」これは，ある日の『北海道新聞』に掲載されたものである。何も旅行代理店の広告ではない。北海道の美深町と姉妹都市関係を結んでいるカナダ西部のアシュクラフト村の「インターナショナル・カレッジ」への入学呼びかけを，美深町役場が掲載したものである[1)]。また，別の日の『北海道新聞』には，「高校１年生の希望者全員を町費でカナダの姉妹町に短期留学させている」鹿追町の記事も出ている[2)]。さらにまた別の日の新聞には，「火災に遭ったカナダ・プリンスエドワード島（PEI）の『赤毛のアン』の家とそっくりな家を持つ芦別市（PEI のシャーロットタウンと姉妹提携をしている）のカナディアンワールドに，本家カナダから復旧のための資料提供の要請が舞い込んだ。」との記事が出ている[3)]。このように，北海道の自治体とカナダの姉妹都市関係に関する記事を見かけることは，決して稀なことでも珍しいことでもない。事実，「まさかウチの町までがカナダの町と姉妹提携するとは思ってもいなかった」と，ある町の町長自身が驚きの声を上げているように，山間の小さな町までもが姉妹都市提携を行い，カナダに訪問団を派遣するに至っている[4)]。実際，北海道とカナダとの自治体との関係は，その数と質において，日本全国のどの地域よりも抜き出ている[5)]。上の記事は，北海道とカナダとの姉妹都市関係が，現在どのように展開されているのかを示すものであり，同時に，地域の「普通の人々」による国境を越えての活動が決して特別なものではないことを示唆している[6)]。

それでは，姉妹都市関係の枠組みの中で「普通の人々」が関わる，これらの国境を越えての活動は，どのように把握すれば良いのだろうか。姉妹都市関係に見られる種々の活動は，様々な視点から捉えることが可能である。「地域おこし」の一部として見ることもできるし，地方自治体の活動の一端と見ることもできるし，また「国際化政策」の一部とも見ることもできよう[7]。しかし，姉妹都市提携から派生する様々な活動は，訪問団を受け入れる場合でも，派遣する場合でも，また，それらの事業を実現する過程における種々のコンタクトという面においても，これらは，まさしく「普通の人々」による異文化接触に他ならない。実際，カナダを訪問した人は，「今回訪問したアルバータ州は，北国であるという共通点についてすら鹿追とは異なった環境にあり，すべてが異質の世界であることを知った」[8] と述べているように，まさに「異文化との遭遇そのもの」なのである。しかし，現状においては，このような視点の重要性が十分に認識されているとは言いがたい。普通，姉妹都市関係は，「国際親善」，「友好促進」などを目的に掲げ，その影響としては「視野が広がる」とか「国際性が身につく」などが指摘されているが，「交流」という視点を越えるものではない[9]。従って，具体的にはどのような特徴を持っているのか，あるいは，「異文化接触」によりどのような影響がもたらされているのかについては，明確にはされていない。概して活発な活動が見られる北海道の姉妹都市関係の場合も同様の事が言える[10]。

われわれは，このような姉妹都市活動にたいして，異文化接触の視点からアプローチを試みてみたい。その対象は，上述の北海道とカナダとの姉妹都市関係の枠組みの中で行われる「普通の人々」による異文化との遭遇である。今われわれの知的関心を，一般的な形で述べれば，「姉妹都市という枠組みのなかで異文化接触が普通の人々にどのような影響を与えているのか」ということ，つまり，「相手方に対してどのようなイメージを持つに至ったのか，そして，その過程でどのような影響を受けたのか」ということである。より具体的な形で述べれば，北海道の「普通の人々」がカナダおよびカナダ人という「異文化」に接して，「ビックリしたり戸惑ったり」

しながらも，「納得し，理解しよう」とした結果として「カナダおよびカナダ人にたいして，どのようなイメージを持つにいたったのか」，そして，このような異文化接触により「どのような影響を受けたのか」ということである。本稿は，このような問に答えようとする一つの試みである。

II．異文化接触としての姉妹都市関係へのアプローチ

「姉妹都市関係」を異文化接触としての視点から分析する場合，いくつかの明らかにしておくべき点が存在している。姉妹都市関係という分野において，異文化接触により様々なイメージが形成され，イメージとともに「主体」自身も影響を受けることになるが，その「影響の度合い」は，「接触分野や頻度」，「主体の性格と特徴」，「姉妹都市関係というテーマ自体」の性質などによって，異なってくると考えられる。まずは，このような視点から，「影響度」の違いをもたらす要因と，それらの相互関連について明らかにしておくことが必要である。

1．接触のタイプ

一概に「異文化接触としての姉妹都市関係」と言っても，接触する場所とその頻度により，当然，影響の度合いも異なるものと考えられる。つまり，接触する場所が(1)相手方文化内か，(2)自己文化内か，そして接触頻度が(3)多いか，(4)少ないか，により，４つのタイプが考えられ，どのタイプに属するかにより結果に及ぼす影響は大きく異なってくる。

種類 ＼ 頻度	相手方文化内	自己文化内
多い	タイプⅠ	タイプⅡ
少ない	タイプⅢ	タイプⅣ

タイプⅠ：相手方を訪問する場合が，このタイプに相当する。姉妹都市提

携先を訪れるということは，異文化という環境の中に「自己の全存在を24時間」置くことであり，言わば「フルタイム」の接触と言える。従って異文化からの絶えざる刺激に対して反応することが必要になるということを意味している。これは，単に反応するだけではなく，それぞれの反応が適切であるかどうかということを，一瞬一瞬，身をもって体験するということでもある。特に，訪問先でホームステイする場合などは，緊張度も高く，それが滞在期間中持続することになるが，その意味で人々に及ぼす影響は大きい。

タイプII：姉妹都市提携先から訪問団を受け入れる場合が，このタイプに相当する。受入担当職員やホームステイを引き受ける家庭の人達にとっては，訪問団との接触という点では異文化との接触頻度は高いが，タイプIほどは高くはない。また，これは言わば「パートタイム」の接触であり，「いつでも自己の文化」に退避できるという「気楽さ」があるので，その緊張度もタイプIほどではない。さらに，「訪問団との接触」に関しても，異文化全体との接触ではなく部分的なものである。しかし全体的な影響は，タイプIに次ぐものと考えられる。

タイプIII：これも相手方を訪問する場合であるが，接触頻度が低いということは，限られた範囲と時間内での接触を意味している。従って，カナダ人家庭でホームステイをすることはなく，自治体の首長などによる儀礼的な表敬訪問の場合などが，このタイプに相当する。それ故，例え相手方文化内での接触であっても，その影響度はタイプIIほどではないと考えられる。以前はこのタイプによるものが主であった。

タイプIV：このタイプは姉妹都市提携先から訪問団を受け入れる場合であるが，ホームステイによる受け入れなどはなく，単に儀礼的な行事を行うにとどまり，接触時間も限られており，接触頻度も低い。従来は多くがこのタイプに属していた。

以上のように影響度の異なる4つの接触タイプが考えられるが，現在ではタイプIの接触が増える傾向にある。

2．姉妹都市関係の主体と活動の性質

(1) 姉妹都市関係における行動主体は，地方自治体と地域の代表としての一般市民であり[11]，その結果，まず第一の特徴として，「達成意欲の強さ」があげられる。行動主体が，「地方自治体と地域」の代表という性格上，その活動に対して，普通，何らかの公的援助が与えられる場合が多く，単なる観光などの私的な活動に比べ，地域の代表として何らかの成果をあげようとする「意識」が強く見られる。このことは，ある首長が述べているように，「公的な視察や研修となると，どれもが経費の一部をどこかで援助しているのが通例で，参加する者にとっては，それなりに責任と負担を担って旅行するであろうことは十分にはかり知れる」[12]という言葉からも明らかである。

(2) 第二の特徴は，一般的に，相手方に対する感受性（センシティビティ）が高いということである。つまり，相手方に対する興味が強く，かつ相手方を理解しようとする準備と意欲の点で積極的であるということである。とりわけ，相手方の都市を訪問する人達は，地域の代表として選ばれたか，あるいは自から応募した人達であり，かつ上に述べたように「地域の代表」という意識を持っている。そして，このような人達は訪問前に数回にわたって事前研修を受けるのが一般的なことである。さらに，北海道の場合には，地域に居るカナダ人達からも情報を得る機会があり，カナダに対する知識は一般の日本人よりも多く，既にかなり詳しい情報とイメージを持っている場合が多い。ある地域では，少なくとも訪問前に，「カナダ人は外国人がどんな外見であろうと気にしませんし，自分が人と違っていても恥ずかしいと思いません」と，カナダ人から聞くことが出来るのである[13]。このような結果，一般的に，相手方に対して高い感受性を持つものと考えられる。

(3) 結果に影響を及ぼす第三の要因として，姉妹都市活動という枠組みの中で行われる接触の性格も考慮しておかねばならない。まず，一般的に，接触が行われる環境自体が，「姉妹都市関係」という非常に友好的な性質を持っている。また，「姉妹都市関係」という分野でしか見られない友好

的な接触も存在する。つまり，地方自治体の代表として「総督」や州の首相や大臣に会ったり，市役所，学校，各種施設，農場や一般家庭を訪れ，様々な分野の人々と接触することが可能なのである。これは決して普通の観光客では接することができない分野であり，現地に長く住んでいる人でさえも誰もが経験することが出来る種類のものではない。そして，ホームステイをする場合でも，旅行業者などの斡旋によるものではなく姉妹都市関係の下で行われるがために，非常に好意的な状況の下での滞在と接触が可能になるのである。まさに，「カナダを知る上では単なる視察やツアー旅行では到底得られない体験」[14] を得ることができるのである。

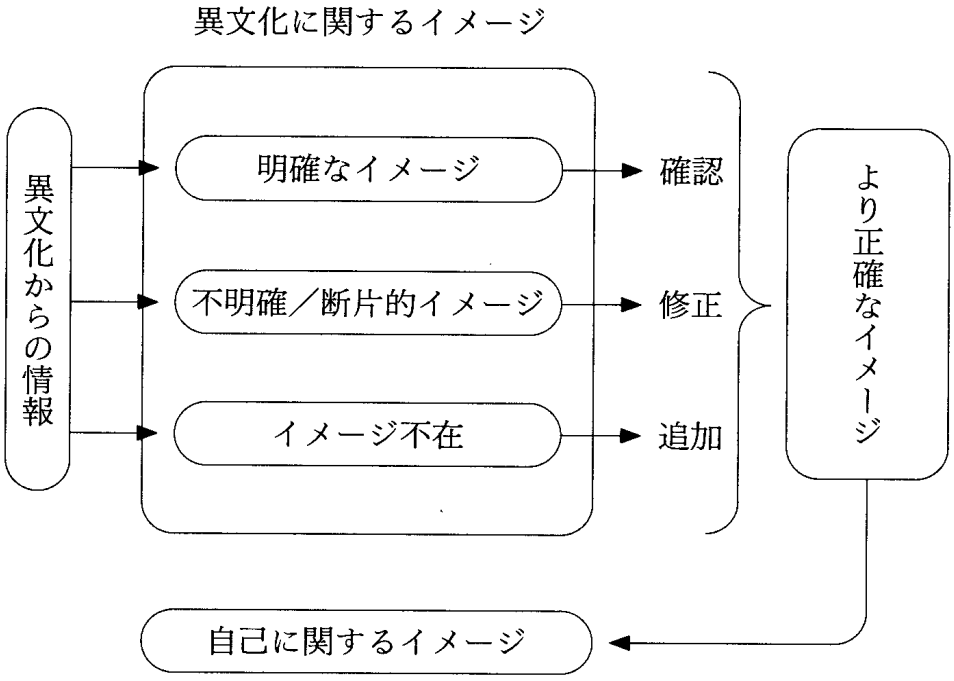
(4) 以上のような姉妹都市関係自体のもつ性質から，一般的に種々の接触から生まれるイメージはプラス・イメージが多いものと考えられる。元来，姉妹都市関係という「友好的」な枠組みの中での接触であるので，国家間や企業間に見られるような競合的な関係や利害の対立などが存在しないのが普通である。また，既に触れたように，相手方に対する興味と好感度という点や相手方に対する知識や体験談を事前の研修や周囲の人達から得ているという点も，プラス・イメージを生み出すのに役立つと考えられる。このような中で，お互いに好意的に接しようとする姿勢で臨み，かつ滞在期間が短いこともあり，いわゆるカルチャーショックは存在するものの，それは初期の「ユーフォーリア」(有頂天) の時期における症状だけであると言えよう。このような結果，一般的には，プラス・イメージが支配的になるものと考えられる[15]。

3．イメージに及ぼす影響[16]

上述のように，姉妹都市関係のもとでの異文化接触においては，既に相手に対するかなり知識を有している分野も少なくはない。しかし，それらは相手方の全ての事項に関するものではなく，当然，情報の分野についても量についてもバラツキがある。従って，「既存のイメージ」は，基本的には情報の量と質に基づいて，大雑把ではあるが，(1)「明確なイメージ」，(2)

「不明確／断片的なイメージ」，(3)「イメージの不在」とに分けることが出来る。「明確なイメージ」とは，もちろんかなりの量の正確な情報に基づいているイメージである。例えば，カナダの自然に関するイメージなどは，このカテゴリーに入ると考えられる。「不明確／断片的なイメージ」とは，例え正確な情報に基づいたイメージであったとしても，その情報が断片的な場合とか，あるいは部分的な情報に基づいて形成されたイメージである。例えば，カナダのロッキーに関する情報の場合は，ロッキーに関してはかなり正確である。しかし，「ロッキーのような自然」が当てはまるのはロッキー山脈付近であるが，「カナダの自然全体」に関してそのようなイメージをもつ場合である。「イメージの不在」とは，「あるカテゴリー」に関する情報が不在のため，なんらのイメージも存在しないことである。例えば，カナダの人々は，「具体的にどのような日常生活を送っているのか」などに関する情報は，「われわれ普通の日本人」の頭には存在していないのが普通である。

異文化接触とは，異なる文化的環境の中で様々な側面に接触することにより，自分で直接情報を得ることである。そして，以上のような「イメージ」のカテゴリーに新たな情報が加えられ，その結果，図のような「確認」，



「修正」,「追加」などが行われ,「より正確なイメージ」が形成され，場合によっては「自己イメージ」が比較されることもあり,「われわれも，こうすべきである」などと，自己の価値観や行動様式にまで影響が及ぶこともあるのである。

4．本稿でのアプローチ

われわれは，上に四つの主な接触タイプを見てきたが，本稿では，その中でも最も影響度が大きいタイプＩに関するもの，すなわちカナダの姉妹都市を訪問する場合を取り上げる。

その場合，訪問者たちが接触する空間を，パブリック，オフィシャル，プライベートの３つに分けて考えたい。まず，パブリック空間とは，一般の観光客をも含めて，誰でもがアクセスできる空間である。次に，オフィシャル空間とは，姉妹都市関係の活動に特有のものであり，公式行事や視察などが行われる空間である。最後に，プライベート空間とは，ホームステイ家庭での空間である。以上の順序は，普通，姉妹都市を訪問する人達が接触する時間的推移と一致している[17]。そして，パブリック空間からオフィシャル空間へ，そしてオフィシャル空間からプライベート空間へ移行するに従って，その接触の密度と影響も高くなるものと考えられる。

本稿では，訪問者がこれらの３つの空間における接触より，カナダとカナダ人にたいして形成したイメージの抽出を行い，その特徴と影響について見てゆく。具体的には，これらの３つの空間におけるイメージの抽出を行い，各イメージには番号をつけ，原則的に訪問者たちが接触する順序に従って列記していく。イメージの「内容」に関しては，出来る限り接触者たちの言葉のまま表現するようにした。イメージの対象としては,「ハードの項目」(H) と「ソフトの項目」(S) との二つに分類を行った。自然，街並み，家などの物理的な環境や「表面に表れた外観」など「ハードの項目」(H) であり，行動様式，マナー，価値観，社会での役割などは「社会を動かすプログラム」に相当するものであり,「ソフトの項目」に区分される。また,「ハードの項目」に関するイメージでありながらも，それを通して社

会の価値観や行動様式にまで関連するものは，同時に「ソフトの項目」(S)としても扱った。このように区分することにより，訪問者が単に「表面に表れた外観」しか見ていないのか，あるいは「社会を動かすソフトの部分」まで理解しようとしているのかを知ることが出来る。従って，例えば，単に「自然」に関するものであれば当然「ハードの項目」(H) として扱うが，「自然」に関するものの場合でも，「自然保護」との関連で言及される場合には，同時に「ソフトの項目」(S) としても扱うことになる。各イメージの評価（評）の欄は，肯定的な場合は（＋），中立的な場合は（0），否定的な場合は（－）とした。例えば，自然に関するようなものでも，単に「大きい」というだけであれば（0），良い意味での「驚き」や「感動」を表したものであれば(＋)とし，「殺風景」などの言葉が使われている場合は(－)とした。

尚，対象とした姉妹都市は，釧路市，名寄市，函館市，網走市，池田町，上砂川町，白老町，石狩町，上川町，鹿追町，上富良野町，陸別町であり，イメージの抽出にあたっては，62名の報告と36名の方々とのインタビューによっている[18]。

III. パブリック空間におけるイメージの特徴と影響

「パブリック空間」とは，既に述べたように，観光客をも含めて誰もがアクセスできる空間である。他の場合と同様に，姉妹都市を訪れる場合も，カナダに到着した時点から異文化としてのカナダとの接触が始まるわけである。それではカナダの姉妹都市を訪れた人々は，このパブリック空間においてカナダおよびカナダ人に実際に接して，どのようなイメージを抱き，どのような影響を受けたのであろうか。ここでは，まず姉妹都市訪問者たちが，カナダに着いてから相手方の都市に入るまでの間の主なイメージの抽出を行う。具体的には，自然環境から都市の景観，そして都市の内部へ入り，姉妹都市の町の中での接触と言う具合に，原則的には接触の順序に従い，また，「目に付きやすいもの」（ハードの側面）から「目に付きにくいもの」（ソフトの側面）の順序で扱っていく。このようにして得られたイ

メージの総体が，表Ⅰ「パブリック空間におけるイメージ」である。従って，表の項目を追っていけば，訪問者たちの接触の追体験が可能となるが，ここでは，この表に基づいて，「パブリック空間におけるイメージの特徴と影響」について明らかにしてみたい。

1．抽出イメージの一般的特徴

まず，パブリック空間において抽出されたイメージの一般的特徴を見ておこう。表Ⅰに抽出された項目は全部で118項目であり，その内訳は次の通りである。

種類＼評価		＋	0	－
A：ハードのみのイメージ	56	33	20	3
B：ハードとソフトのイメージ	50	44	5	1
C：ソフトのみのイメージ	12	11	1	0
	118	88	26	4

やはり「目に付きやすいもの」(ハード)に関するイメージの数は多く，AとBとの合計の116であり，118項目のほとんど全てと言ってもよい。しかし，116の中の50のイメージは，ハードに関するイメージでありながらも，同時にソフトの側面にも関連しており，カナダ社会の価値観や行動様式の認知に関するものである。そして残りの12項目がソフト，つまり価値観や行動様式に関するものである。これらから，訪問者たちは単なる外観のみならず，その背後にあるソフトの部分にも，かなりの関心を示していることが分かる。そして，118項目のうち，プラスのイメージは88項目，中立的なイメージは26項目，マイナスのイメージは4項目であり，全般的に極めて良好なイメージを抱いていると理解できる。

それでは表Ⅰに表れたイメージ全体として，どのような特徴があり，どのような影響が窺えるであろうか。以下に，確認イメージ，修正イメージ，追加イメージ，そして自己イメージに関するイメージの順に，その特徴と影響について見ていこう。

表Ｉ　パブリック空間におけるイメージ

	No.	内容	H	S	確	修	追	自	評
自然環境（ロッキー／規模／ハイウエイ／エネルギー）	1	北海道は土地が広く自然が豊かで、特に大雪山国立公園などは最高だと思っていたが、この気持ちをあっさり（ロッキーに）打ち砕かれてしまいました。	X		X				+
	2	初めてカナディアン・ロッキーの山岳や湖にふれ、「この小さな３５ミリカメラでは写し取れない。」と思った時、しばらく声が出なかった。	X		X				+
	3	バンクーバーとエドモントンは１時間の時差がある。国の広さに驚き。	X		X				+
	4	すばらしいコロンビア大氷原で働く若い女性。ガイドさんかと思いしや、運転をするのです。タイヤの直径１メートル５０センチもある大型雪上車です。観光客を乗せさっそうと働く乙女、急坂道を自信たっぷり。感心するのみです。	X	X		X			+
	5	キャンピングカーと何台もすれ違い楽しそうな家族の顔が車窓から見える。北海道の大雪や阿寒国立公園では見られない光景だ。	X	X			X		+
	6	事前研修でスライドでは見てはいたが、、、バンクーバーから飛行機でロッキー山脈を越え、エドモントンに着いた。やはり広い、北海道の広さとは、まるで比べものにならない。	X		X				0
	7	予備知識としてはソ連に次ぐ世界第二の国土を誇る大国と理解はしていても、島国に育った日本人にとって果てしなく広がる大陸は、先ず第一の驚きである。	X		X				+
	8	第一印象は、日本では北海道と思っていたのに、まだ広いこんな広大な土地が有るとは、話に聞き、テレビで見ていた自分の先入観より上まわっていた驚きでした。	X		X				+
	9	人口密度も北海道の１平方キロ当たり７１人に対し、3.25人。	X		X				0
	10	人口密度は１平方キロに３人。「実際にこのめで見る広さは地平線の彼方まで小麦畑が続いている」と感じられる。	X		X				+
	11	土地が広いと言う事は事前研修の時に町長さんのお話で聞いておりましたが、やはり自分の目で見なければぴんときません。見渡す限りの平坦な土地、農家の1戸平均の土地が何と四百町だそうです。私の家の12～3倍という事です。	X		X				0
	12	最初に驚いた事といえば、空が平らというか地平線がどこまでも続いている事、道路の広い事には目を見張りました。自分達の住んでいる鹿追から空を見ると何か丸い感じがするのでよけい比較されるのかもしれません。	X		X				+
	13	地平線がはるかに遠くに見える。	X		X				0
	14	雄大な土地には私もいささか驚きのいろを隠しきれなかった。	X		X				+
	15	北海道の何十倍もの小麦畑。	X		X				+
	16	左右に見える農耕地の黄色いナタネ畑。緑の小麦畑などの広さは北海道の何十倍あろうかとただ驚きの一言にすぎない。	X		X				+
	17	大森林と農業の大地というが、なるほど行けども行けども小麦畑が続く大穀倉地である。	X		X				0
	18	ハイウェイのバスから。視界いっぱいに広がる広大な土地。やっぱり大いなるカナダだ。	X		X				+
	19	北海道の自然は最高と思っていたが、打ち砕かれる。道路広くゴミなし。	X	X			X		+
	20	カナダに渡っての第一印象は広い土地と緑の多い事。	X				X		+
	21	道路が広い事には目を見張りました。	X				X		+
	22	公園内のハイウエイにはゴミ一つない。駐車場や休憩所には鉄製のゴミ入れが設置され、熊が来ないようになっている。	X	X			X	X	+
	23	日本では見られない自然美、自然保護は大いに見習うべきだと思った。	X	X			X	X	+
	24	道路網もよく整備され高速道並の構造などはふんだんにある土地利用をものがったている。	X	X			X		+
	25	エドモントン周辺のフリーウエイをバスで走ってみても、小麦畑の小高い所に天然ガスの炎が見える。	X				X		0
	26	ストーニープレイン郊外。油田のガス抜き煙突から、火の吹き出ているのを見ておどろく。	X				X		+
	27	アルバータ州では、いたる所に原油を汲み上げるポンプや天然ガスの処理場があり、カナダ最大のエネルギー資源の豊かさを見せつけられる思いでした。	X		X				+
	28	エネルギー資源の豊富なカナダは町はずれの各所に石油のボーリングがあり、特に驚いた事は天然ガスが長いパイプの先より燃え上がっている光景に視察団一行思わず歓声を上げた。誠に羨ましい限りでありはじめて見る強烈な印象であった。	X		X				+
	29	いたる所に原油を汲み上げるポンプや、天然ガスの処理場があり無尽蔵を思わせる。	X		X				+
	30	一見黒い大砲にも似た石油採掘機が、いたる所で自動的に動いている。こんなに豊富な資源国を目のあたりにしたのも驚きである。	X		X				+
	31	バンクーバー：「バスの中から見る市内は実にきれいで緑と住宅のほど良い調和に感激、すきまなく敷きつめられた芝生は、カーペットの様である。	X				X		+
	32	何と言ってよいのか天国のような清潔な都会	X				X		+
	33	ホテルから。高層ビル周辺と、緑の空間とは区別され、この緑の木々の配置と個人住宅が画一的に納められ、これらがトータルされた都市計画を思わせる実に美しい構図だ。	X	X			X	X	+

都市（街の景観／街並み／国旗／住宅／公園）	34	地平線まで広がる水銀灯の明かりは、日本とはまるで違い計画された町づくりがうかがえる。	X	X			X	X	+
	35	ホテル最上階のラウンジから。３６０度遠望しても繁華街的ネオンきらびやかな所が無い。勿論メイン通りなどには大小の街灯はあるのだが赤い灯というのは、高い建物の屋上に点灯しているだけなのである。資源豊富な国といえども無駄は決してしない。	X	X			X	X	+
	36	緑の木が都会の中にも目立つ、さすが森林王国カナダと思いました。	X				X		+
	37	緑の森とそこに点在する建物と芝生の調和は、東京にもなく、札幌にもない。本当に「美しい」街並みである。	X				X		+
	38	街がすごくきれい。	X				X		+
	39	電柱や電話線は道路に埋められているので、街並みがスカッとしている。	X	X			X	X	+
	40	看板は少ないし、ある場合でも周囲と調和している。	X	X			X	X	+
	41	市内をバスに乗りながら気がついた事は、住宅街にはあまり大きな家はなく、平屋建が多い。しかし家の周りには必ずと言っていいほど芝生や樹木を植えており、北海道のような花壇、野菜畑などが少ない。	X	X			X		0
	42	家の色がベージュやチョコで芝生のグリーンとマッチしている。	X				X		+
	43	街の中の芝生の手入れが良いこと、道路などが美しいことには日本人として見習わないとならない。	X	X			X	X	+
	44	街並みが美しく公園のよう。	X				X		+
	45	町中を公園化する感じで、芝生を作り、それも自分の所だけではなくて。	X	X			X	X	+
	46	家々の周り、そして、道路のふちの草などを見ても、きれいにかってあり、一直線の道路がつづいている。何と手入れのゆきとどいた町であろうか。	X	X			X		+
	47	信号機がほとんど見あたらない。日本では小さな町にもあるが。	X				X		0
	48	信号が縦についている。	X	X			X		0
	49	一番感じたのは公衆道徳です。公園、街並み、都市形態、公衆のマナーのよさです。	X	X			X	X	+
	50	治安が良い。		X			X		+
	51	オカナガン湖の付近であれば高さを規制して、それ以上のものを建てさせないとか。ウチの場合は、まだ規制まではいかないんですが。、、、とくに冬が長いですから、水色や青っぽい色だけでは暗くなりますからね。町のカラーとしてワインからーの明るい色を奨励しています。、、、街並みも一定の高さまでいけば良いんでしょうけど、やはり、日本ではそういかないですね。	X	X			X	X	+
	52	町作り、道路、交通など長期的に物事を見たくなる。日本は短期間の中で採算ベースで考え、困ってから物事をやっているのが日本の都市計画づくり。公共の施設を皆んなで大事にして、中は個人だからどうでもいい。日本は反対でプライベートは大事だが、他は関係ない。	X	X			X	X	+
	53	国旗や州旗、町旗は行く所で見受けられた。	X	X			X		+
	54	総ての人々が如何に国を愛し町を愛しているかがどこへ行っても国旗と町旗を掲揚し象徴としている姿に深く感動を覚えて帰りました。	X	X			X	X	+
	55	隣家との境に柵無し。	X				X		0
	56	住宅は塀や垣根はなし。	X				X		0
	57	大きな家でも垣根はない。	X				X		0
	58	住宅は立派で、垣根無しに芝生が美しい。	X				X		+
	59	芝生が綺麗に刈られ、日本のように塀をしないので、連続的に繋がっている。	X				X		+
	60	住宅周辺は芝生を植えてよく管理されている点、北海道吾が町とは異なると感じました。	X	X			X		+
	61	緑と住宅のほど良い調和に感激、隙間なく敷かれた芝生はカーペットの様である。	X				X		+
	62	住宅のまわりも、道路わきも美しい芝生でうめつくされている。	X				X		+
	63	庭造りなどの趣味はない模様だが、家の周りは芝生で整備され大変感じが良い。	X	X			X		+
	64	住宅の周辺は必ず芝生で、庭にはモミの木が２～３本植えてあるというのが普通で非常に落ちついた気品を保っている。	X				X		+
	65	住宅街の風景も日本とは違って庭らしきもの、垣根などは見あたらない。花はほとんどなく一面芝生が植えられており、いかにも殺風景な感じ。	X				X		-
	66	こじんまりとした住宅街、すきまなく植えてある芝生には感心しました。	X				X		+
	67	家は自然の起伏を利用して、平地に立っていない。庭が広い。	X	X			X		0
	68	丘などの地形に自然を生かした建て方をしている。	X	X			X	X	+
	69	住宅建築の仕方が、日本だと平らにしないと住宅は建てられないんだという感覚があるんですけど、向こうは自然の地形に沿って建てて、団地造成、乱開発をしたというイメージが全然ないんです。そういう面で大いに感心しましたし、参考になりました。	X	X			X	X	+
	70	公園の管理がほんとうに行き届いている。		X			X		+
	71	公園の手入れが行き届いている。		X			X		+
	72	飲み物、食べ物の露店、自動販売機など一切なく、したがって公園にはゴミ一つ落ちていな		X			X	X	+

都市（ゴミ／自動販売機／交通／店舗）		い。タバコを吸う私はズボンのポケットが”吸いがら入れ”になり、夜、掃除に一苦労した。							
	73	公園一つにしても、この町ぐらいの広さはある。	X				X		+
	74	自然を愛するといえば、エドモントン市の中心には大きな州都公園があり、きれいに手入れされた芝生が広がり、ピラミッド型のガラス張りの大きな植物園があった。又樹齢100～150年といった大木が森林の中にそそり立っています。カナダへ開拓に入ったイギリス人達が自然を大切に残しながら開拓し、またこの自然を今日まで保存してきたことを見て偉大なものを感じました。	X	X			X	X	+
	75	墓地にも管理人がおり綺麗。	X	X			X		+
	76	道が広い。どこに行ってもキレイで、煙草の吸いがらは無し。	X	X			X	X	+
	77	道路が広くとってあり、特に（他のどこの町も同様でしたが）ゴミが落ちていません。こういう点では、日本はいやだなあと思わざるをえないでしょう。	X	X			X	X	+
	78	町の中にゴミなし。環境を大事にしている国。日本も町作りに導入すべき。	X	X			X	X	+
	79	タバコを飲んでいる人は少ない。トロント辺りでは街はきれいのに吸いがらが沢山。	X				X		0
	80	朝の７時半に、人が出てくる前にゴミ集めがくる。	X	X			X		+
	81	自動販売機なし。酒を売っていない。	X				X		0
	82	自動販売機なし。飲み物、食べ物の露店無し。	X	X			X	X	+
	83	夜のケネルへと勝手に足は進んだが、ケネルの夜の町はスナックもなければバーもない（日本とは違う！）	X				X		0
	84	交差点の通過が実に丁寧であること。スクールバス乗降中、バスから後車に対して正式ストップ標識が出されて数名の後続車は、バス発車まで静かに停車してバスの発進を待っていた。交通事故多発の本道としては学ぶべきことだはないだろうか。	X	X			X	X	+
	85	横断歩道を渡らない人もいるが、車は静かに止まる。	X	X			X	X	+
	86	車のクラクションを聞いたことがない。	X	X			X	X	+
	87	信号は赤でも小回りはO.K.		X			X		+
	88	店舗の外の照明なども少なく、質素な建物が多い。	X				X		0
	89	デパートやショッピングセンターの外見は、本当に地味で、日本とは大分感じが違います。	X				X		0
	90	エドモントン・ショッピング・センターの売場面積は３０００坪位の平屋。駐車場は広く、売場面積の５倍ぐらいで、「これは、十勝のショッピングセンターでは見ることのできない光景です。」店員少なく、レジ係ぐらいしか目につかない。徹底した経費の節約と合理化している経営システムは参考にすべき。	X	X			X	X	+
	91	変わった発想で目を引いたのは、リサイクルというか、古い時代の物が展示され即売もする仕組みになっているコーナーがあり、ドアの取手だとか、ナイフ、フォーク類でも立派に使用できるものがあって興味を引きました。	X				X		0
	92	ショッピングセンターに、、、骨董品がコーナーで販売されておりそれが実用品として売買されているのを見て品物を大事にする精神が活かされていると思った。	X	X			X	X	+
	93	ショッピングセンター内にも、ドアの取手からナイフ、フォークなど、古物のリサイクル販売。	X				X		0
街の中（ホテル・路上／店にて）	94	ホテルとか街で、目を合わせて挨拶をするでしょう。ホッとするし、優しさを感じますね。		X			X		+
	95	エレベーターの中で簡単に声をかけ合いますが、日本の場合は習慣の違いというか、そうはいきません。		X			X		+
	96	リンク分からぬ。道を尋ねたら車で送ってくれた。		X			X	X	+
	97	知らない人でも、気軽に挨拶、「ハーイ」と挨拶をする。		X			X		+
	98	たまたま遅れて場所が分からなくて、車で案内された。		X			X	X	+
	99	エドモントン市内では、くつ屋さんまでの道を尋ねると、いっしょに三軒ものお店をまわって、別れ際に自分のコレクションのエメラルドの原石をプレゼントしてくれた初老の紳士。親切に国境はなく、人と人を結ぶのは心だとあらためて思いました。		X			X	X	+
	100	我々が向こうに入っても目立った感じはしない」ガイジン扱いはされない。日本のようにジロジロ見られない。	X	X			X		0
	101	自分の感覚でおしゃれを楽しんでいる。コートの人もいれば、半袖のブラウスの人もいる。着物と下駄でと思ったが、人に笑われるのではないかと気をつかい、慣れない靴を履き、痛いのをガマンして歩くのが馬鹿らしくなりました。	X	X			X	X	+
	102	アルバータではガソリンが３０円。	X	X	X				+
	103	肉、果物が安い。	X	X			X		+
	104	売店の品物の高いのには驚く。約、日本の２倍。	X				X		0
	105	フィルムは日本の2～３倍。百円ライターは６倍。	X				X		0
	106	漫画の本、日本では３、４百円が、１６００円以上。日本では５０円程の消しゴムが３、４百円するので何も買わず。カナダと言えば、安いソバ、小麦、エン麦、木材というのが日本	X			X			0

街の中（店にて／レストラン）		でのイメージだったので、カナダの現実を見た。							
	107	買い物をしても包んでもくれず袋もくれません。それも経済のためだそうです。	X	X			X		0
	108	無駄な所に金をかけず。包装紙や袋は無駄使いをしない。日本は資源が少ないのに無駄使い。考えるべきだ。	X	X			X	X	+
	109	日本の場合はプレゼント品は、きれいな包装紙に１コづつ包んでくれますが、あちらでは、プレゼント品でも紙に包まず、沢山あっても紙袋にまとめて、入れてくれるだけ。資源を大切にしている事が感じられた。	X	X			X	X	+
	110	向こうでは、どんな小さな店でも機械でやってセールスタックスは必ず政府に税金がはいる。		X			X		+
	111	じっと待って並ぶ。犬や猫が大人しい。性格が大らか。	X	X			X		+
	112	レストラン「ザ・ボートハウス」昔のボートの製造工場を改造したもので、天井の梁は荒削りのままで、結して一流レストランとは言えない感じであった。	X				X		−
	113	ステーキが１２００円～１３００円。日本では５、６千円。	X	X			X		+
	114	レストランで食事は日本の1/3ぐらい。	X	X			X		+
	115	カリフォルニア米はうまい。	X			X			+
	116	米料理が旅の後半に。この米がまずくて私はのどを通すのに大変苦労した。	X				X		−
	117	レストランでカレーを注文。パラパラのご飯にカレーが出てくる。「国が違うとこうも変わるものかと、顔を傾けながらいただいたが、全部は食べられなかった。」	X	X			X		−
	118	食事の後で請求書をいちいちチェックするのを見てビックリしましたが、ドライというより当たり前のことであるんですね。		X			X		0

2．確認イメージ

当然のことながら，カナダの自然環境の規模や雄大さに関して，訪問者たちは，「話しに聞きテレビで見て」知っており，「明確なイメージ」を持っていたのであるが，このイメージに対して21項目にわたり確認と場合によっては強化が行われている。そして，これらのほとんどが，ハードに関するものである。「カナダの大自然」に関するイメージについては，ここでは「確認イメージ」として扱ったものの，単に「確認」してさらなる「強化」を行うというだけではなく，それらは「想像を絶したもの」が多く，このように「分かりやすいハード」に関するものであっても，強烈なインパクトを与えている。

一般的に日本人の誰もがカナダの大自然には圧倒されるのは良く理解できるが，われわれがここで扱っているイメージは，北海道からの訪問者のイメージである。それも，大雪国立公園近辺や道東の大規模農業が盛んな地域の人々のイメージも含まれているのである。ところが，「北海道は土地が広く自然が豊かで，特に大雪山国立公園などは最高だと思っていた」人達が，イメージNo.1からNo.8に見られるように，「この気持ちをあっさり（ロッキーに）打ち砕かれてしまいました」とか，「この小さな35ミリカメラでは写し取れないと思った時しばらく声が出なかった」とか，「やはり広

い，北海道の広さとは，まるで比べものにならない」と述べているのである[19]。これらは，まさにカナダの自然が「想像を絶するもの」であり，北海道の自然に対する自己イメージの相対化の始まりであると言える。その他に関しては，一般的に，既存のイメージと現実との確認作業が行われている。例えば，イメージ No.9，No.10 のように，「人口 1 平方キロに 3 人」とは「実際にどのようなものか」という確認であり，No.13 のように「土地が広いと言う事は事前研修の時に町長さんのお話で聞いておりましたが，やはり自分の目で見なければぴんときません」[20] という表現に端的に表されている。また，エネルギーに関しても豊富であるというイメージは存在していたものの，イメージ No.27－No.30 のように，「天然ガスが長いパイプの先より燃え上がっている光景」を見て「エネルギー資源の豊かさ」[21] を確認すると同時に強化が行われているのである。

3．修正イメージ

パブリック空間において修正されたイメージ項目は少なく，わずか 3 つであり分野も様々である。その一つはカナダ女性と社会に関するものでありソフトの部分に関連している。まず，コロンビア大氷原でタイヤの直径が 1 メートル 50 センチもある大型雪上車を運転するのは，日本的感覚からすれば「当然男の仕事」でありカナダでも当然同様であると思っていた。ところが，「若い女性ガイドさん」らしき「乙女」が観光客を乗せて急坂道を自信たっぷりに働く様を見るのは初めてであるし，驚くと同時に感心している。(No.4)[22] ここに，カナダ女性の社会における役割と関わり方が，日本とは異なることを認識するのである。二つ目は，「カナダと言えば，安いソバ，小麦，エン麦，木材というのが日本でのイメージ」であり，一般的に物価は安いと思っていたが，漫画の本や文房具などは高く，「カナダの現実を見た」と表現しているように，イメージの修正が行われている。(No.104－No.106)[23] 最後の点は，「外米はマズイ」というイメージに対して，実際カリフォルニア米を食べてみて，そのイメージを修正せざるを得ないということであり[24]，「米不足」の時に日本人が経験したように，実際に「既

存のイメージの修正」には異なる現実を目の当たりにすることが必要だということである。

4．追加イメージ

さて，新たに追加されたイメージは94項目にのぼり，一番多く，その分野も自然環境から始まり，街の景観や街の中での接触にいたるまで様々である。そして，それらのうちの83項目がハードに関するものであり，その中の48項目がソフトにも関連するものである。「ソフトにのみ」関連するイメージは12である。従って，ソフトに関するイメージは合計60に及び，カナダ人の生活様式を知ろうとする関心と意欲とが窺える。また，これらのイメージの中には，「自己イメージ」に影響を与えるイメージもかなり存在しているが，それらは後で取り上げることにする。以下，主なイメージについて見ていくことにしよう。

まずは，カナダの自然の中で何台ものキャンピングカーに出会い，「楽しそうな家族の顔」を見ることになるが，これは北海道の「国立公園でも見られない光景」であり，カナダ人の休暇の過ごし方という行動様式の一部を知ることになる。(No.5)[25]「自然の中や公園の中にゴミがない」という光景も初めてのものであり，目を引く光景である。そして，イメージNo.22やイメージNo.23のように，自然保護や動物に対する扱いについてのイメージも追加されるが，これは以下の「自己イメージ」に関する項目とも関連している。

町に近づくにつれ，「計画された都市づくり」と「個人の住宅に垣根がなく芝生が全体につながっている」イメージが，表からも明らかなように圧倒的多数をしめることになる。イメージNo.33に表されるように，「高層ビル周辺と緑の空間とは区別され，この緑の木々の配置と個人住宅が画一的に納められ」た景観の中に，「トータルな都市計画」を感じ，「実に美しい構図だ」との結論にいたるのである[26]。日本で目にする光景とは全く異なっているがために，そこに，「日本とはまるで違った計画された町づくり」の存在を実感することになる。(No.34)[27] また，個人の家の周りには垣根はな

く，手入れの行き届いた緑の芝生が繋がって，「住宅のまわりも道路のわきも美しい芝生でうめつくされている。」そして，「緑と住宅のほど良い調和に感激」し，「緑の森とそこに点在する建物と芝生の調和は，東京にもなく札幌にもない本当に『美しい』街並みで」であり[28]，町全体が「美しい公園のよう」であると表現されている。何人もの人々が異口同音に述べているように，「道路が広くゴミや吸殻がない」のも日本では考えられないことであり，驚嘆している。「電柱や電話線も見当たらず」，「看板は少ないし，ある場合でも周囲と調和している。」日本ではお目にかかることのない，この様な環境を目の当たりにして，「天国のように清潔な都会」というイメージまで現れている。(No.32)[29] これらのイメージは，ほとんどがプラスのイメージであるが，例外的に，「家の周りには必ずと言っていいほど芝生や樹木を植えて」いるが「北海道のような花壇，野菜畑などが少ない」とか，「庭造りなどの趣味はない模様だが」といったあまり肯定的ではないイメージや，「住宅街の風景も日本とは違って庭らしきもの垣根などは見あたらない。花はほとんどなく一面芝生が植えられており，いかにも殺風景な感じ」と言ったマイナスのイメージも存在している。(No.41，No.63，No.65)[30]

町の中の，その他の光景では，空を見上げれば，「あちこち」に国旗が旗めいているのも日本では見慣れない光景であるので，すぐに目に入るものである。(No.53, No.54)[31] また，さらに注意深い観察により，「住宅の建て方」が日本とは異なり「自然の地形を生かした建て方」をしている，とのイメージも追加される。(No.68，No.69)[32] これらは，後に触れる「自己イメージ」とも関連している。

さらに町の中に入って行き，詳しく観察することによって得られる追加イメージも，かなり存在する。やはり，「街の中にもゴミはない，吸殻はない」光景は，日本とは異なる光景で驚きである。日本では，「いたる所に」自動販売機があるので，「自動販売機がない」光景も，オドロキである。さらに，「タバコを飲んでいる人は少ない」というイメージも追加される。そして，「町の中にゴミがない」というイメージに，「自動販売機がない」ということと「タバコを飲んでいる人は少ない」というイメージとが関連さ

れて認識されている。(No.76－No.82)[33] また，行動範囲が広がり大都会の状況と比較できる場合には,「トロント辺りでは街はきれいのに吸いがらが沢山ある」という具合に，より正確で詳細なイメージの追加が可能になる。(No.79)[34] さらに注意をして好奇心旺盛な人は,「朝の7時半に人が出てくる前にゴミ集めがくる」状況にも出くわすことができ,「都市景観」にたいするカナダ人の行動様式についての詳しいイメージが追加されることになるのである。(No.80)[35]

店舗の外観に関しては,「日本の常識」からすると,「外見は本当に地味で」日本とは感じが違い,「外の照明なども少なく質素な建物が多い」と映っている。(No.88，No.89)[36] 同様にレストランなどに関しても,「昔のボートの製造工場を改造したもので，天井の梁は荒削りのままで，決して一流レストランとは言えない感じである」[37] との，マイナスのイメージになっており，日本の状況を判断の「基準」としているのが良く分かる。

一見どこの社会でも同じように思われがちな，車と人との関係についても，注意深く観察することにより，そこに日本とは異なった行動様式を発見して，イメージの追加が行われている。「交差点の通過が実に丁寧であり」,「横断歩道を渡らない人もいるが車は静かに止まる」[38] 光景に感心している。また，スクールバスの乗降中は後続の車は止まってバスの発進まで待っている光景に出くわし，スクールバスは日本には無いものの，仮にあったとしても，そのような状況は考えにくいものであり，ここでもカナダ人の行動様式に感心している。さらに，注意深い人は，カナダでは右側通行であるが，赤信号であっても小回りの右折をしている車に気づき,「合理的」であるとの判断にいたっている。(No.84－No.87)[39]

ショッピングセンター内では，いわゆる日本的感覚からすれば「古物」と称される物が売られているに出くわし,「古い物は捨てられる日本社会」の常識からすれば,「およそ一般には売買される代物」ではなく，目を引くものであり「変わった発想」であると理解される。「ドアの取手とかナイフ，フォーク類でも立派に使用できるものがあり」,実際に売買されている光景を目の当たりにして，日本社会とは異なる生活様式の存在を発見するので

ある。(No.91－No.93)[40]

買い物をしても，日本とは異なる「やり方」を知ることになる。買い物をすれば，「きれいな包装紙に1コづつ包んでくれる」日本的な行動様式からすれば，「買い物をしても包んでもくれず袋もくれません」と，違和感を感じる人もいる。普通は，大きな紙袋に入れてくれることが多いが，それにしても「プレゼント品でも紙に包まず，沢山あっても紙袋にまとめて，入れてくれるだけ」の文化の存在を知ることになる。(No.107－No.109)[41]

対人関係に関しても，日本社会では見られない接触を通して，イメージの追加が行われる。普通，日本ではエレベーター内は「無言の空間」が常識であるが，「簡単に声をかけ合う」という異なった状況に出会うことになる。「ホテルとか街で目を合わせて挨拶をする」光景も，日本とは異なっており，戸惑いながらも，「ホッとする」と同時に「優しさを感じる」のである。しかし，「日本の場合は，そうはいきません」と，異なる文化の違いを認識するのである。(No.94，95)[42]

行動様式に関しては，レストランなんかで並んで待つ様子も日本では余り見かけるものではないので，「目を引く」ものである。また，犬が店の前で大人しく待っている姿や，レストランで食事中はテーブルの下にうずくまっている様子も，日本では見られることはない。このような状況に出会い，「犬や猫が大人しい」そしてカナダ人の「性格は大らかである」とのイメージを追加することになるのである。(No.111)[43]

注意深く観察する人は，イメージ No.110 や No.118 のように普通では見逃しそうな側面にも目を向け，カナダ社会やカナダ人の行動様式の解釈を行っている。カナダでは「どんな小さな店でも機械でやってセールスタックスは必ず政府に税金がはいる」というように，必ず領収書に記載されるので「日本のようにウヤムヤにされることはない」，とのイメージを追加している[44]。また，レストランなんかで男性が「食事の後で請求書をチェックするなど」の光景に出会い，最初は違和感をおぼえ戸惑うのであるが，「ドライというより当たり前のことであるんですね。」と解釈をするようになる[45]。

5．自己イメージに関するイメージ

自己イメージに関するイメージは32項目であり，これも様々な分野にわたっているが，ハードとソフトに関するものが29，ソフトにかんするものは3つである。これらの中には，上述のように「追加イメージ」とオーバーラップするものがかなり存在している。既に上に述べたように，「自己イメージに関するイメージ」は，接触者自身の価値観や行動様式にも影響を及ぼすものであり，そのインパクトは大きい。

自然環境に関するイメージの項目の中でも，イメージNo.22やNo.23などは，「カナダ人と自然との関係」についての態度・価値観に関するものである。「公園内のハイウエイにはゴミ一つない。駐車場や休憩所には鉄製のゴミ入れが設置され，熊が来ないようになっている。」[46]との表現には，自然の中の公園も手入れが行き届き，野生動物に対するカナダ人の態度を見てとっている。そして，「日本では見られない自然美」も，決して「自然のままに放って置いた」結果ではなくて，人為的結果であり，「自然保護は大いに見習うべきだ」との思いにいたり，日本人と自然との関係を問い直している。

人が生活する町という広い意味での住環境に関しても，日本では見られない「清潔な環境」の存在が，訪問者たちにインパクトを与えている。「道路が広くとってあり，特に（他のどこの町も同様でしたが）ゴミが落ちていません。こういう点では，日本はいやだなあと思わざるをえないでしょう。」とか，「町の中にゴミなし。環境を大事にしている国。日本も町作りに導入すべき。」とか，あるいは「街の中の芝生の手入れが良いこと，道路などが美しいことには日本人として見習わないとならない。」など，カナダ人の生き方と価値観に関するイメージは，同時に日本人の生活様式・行動様式に対する価値判断の見直しにも関連しているものである。(No.77, No.78, No.43)[47]そのような環境では，タバコの吸殻を捨てるわけにはいかず，「タバコを吸う私はズボンのポケットが〝吸いがら入れ〟になり，夜，掃除に一苦労した。」と述べているように，訪問者が「日本では当たり前」に行っていた行動様式をも変えざるを得ないほどの影響を与えている。(No.

72)[48]

さらに街の景観や街並みに関しても，日本とは異なる状況を観察しているのは既に上に見た通りである。しかし，それらのかなりの部分が，「日本とは異なる状況」の認識のみならず，自己のイメージにも影響を与えるものである。すなわち，「自分さえよければ他は関係がない」という日本の状況からすれば，目の前に展開される「町作り，道路，交通」などは長期的視野に立った「都市計画」であり，まさに驚くべきことなのである。(No. 51，No.52)[49] そして，住宅の建て方に関しても，自然の地形を生かした建て方をしている点については，既に「追加イメージ」の箇所で触れたが，全てを「平らにしないと住宅は建てられないんだという」日本の常識からすれば，新鮮な発見である。「(カナダの住宅の建て方)は自然の地形に沿って建てて，団地造成，乱開発をしたというイメージが全然ないんです」と，大いに感心し，もはや「木をバッサバッサと切って，木も何もない所に道路をつけて，住宅を建てるという時代ではないんじゃないか」と，自らの行動様式やセルフ・イメージにも影響を与えることになる。(No.67－No. 69)[50]

街の中や郊外における「車と人との関係」についてのカナダ人の行動様式についても「追加イメージ」の箇所で既に触れたが，これも自己イメージに影響を及ぼすものである。横断歩道以外でも通りを渡る人に対して，車が「静かに止まる」様子は，「歩行者よりも車の方が威張っている日本」の常識からすれば，驚きであり，カナダ人のマナーの良さと行動様式を見ている。(No.85，No.86)[51] また，「スクールバス乗降中，バスから後車に対して正式ストップ標識が出されて数名の後続車は，バス発車まで静かに停車してバスの発進を待っていた」との観察は，自らの行動様式に対して「交通事故多発の本道としては学ぶべきことだはないだろうか」[52] との判断を下すにいたるのである。

また，祭日でもないのに街のいたる所で掲げられている国旗は，注意せずとも，否が応でも目を引きつけるものであり，祭日と言えども日本では見ることのできない光景である。従って，強烈な印象を与え，「総ての人々

が如何に国を愛し町を愛しているかがどこへ行っても国旗と町旗を掲揚し象徴としている姿に深く感動を覚え」るということになる。そして，同時に，自己および日本人の国旗に対する態度に疑念をなげかける契機となるのである。(No.53，No.54)[53]

「無駄をしていない」，「物を大事にする」というイメージも，様々な分野で見られる。「ホテル最上階のラウンジから360度遠望しても繁華街的ネオンきらびやかな所が無い」光景に，「歓楽街には目映いばかりのネオンが輝いている」日本の状況を思い起こし，「資源豊富な国といえども無駄は決してしない」と判断する[54]。また，ショッピングセンターでは「骨董品コーナー」(アンティークではなく「骨董品」，あるいは「古物のリサイクル販売」と認識されている）があり，「日本では売買されることのない古い物」が，実際に「実用品として売買されているのを見て品物を大事にする精神が活かされている」と思うのである。さらに，買い物をしても，「プレゼント品でも紙に包まず，沢山あっても紙袋にまとめて入れてくれるだけ」であり，「プレゼント品はきれいな包装紙に1コづつ包んでくれる」日本と比べて，「資源を大切にしている」と感じるのである。そして，同時に，「資源が少ないのに無駄使いをしている」日本人の行動様式を「考えるべきだ」と判断することになるのである。(No.35，No.92，No.108－No.109)[55]

ビジネスの仕方に関しても，日本とカナダのやり方の違いが観察されている。大型ショッピング・センターを訪れると，すぐに目に付くことは，「3,000坪の売場面積に，その5倍ぐらい大きな駐車場」である。これほど巨大なショッピング・センターは土地の広い北海道にも存在しないもので，中に入ると，今度は日本の売場の光景と比べれば，店員は居ないようなもので，「レジ係ぐらいしか目につかない」のである。このような違いから，カナダのビジネスの行動様式は「徹底した経費の節約と合理化」に基づいていると判断し，日本も「参考にすべき」であるとの結論にいたるのである。(No.90)[56]

路上で「普通のカナダ人」に道を尋ねると，「車で送っていってくれた」とか，案内してくれたといった例も一つや二つにとどまらない。このよう

な「普通のカナダ人」の行動様式に触れ，「日本では果たしてそこまでしてあげられるだろうか」という自分自身の行動様式に関連させると同時に，「カナダ人は親切である」とのイメージを形成するのである。さらに，イメージ No.99 のように，エドモントン市内で初老の紳士に「くつ屋さんまでの道を尋ねると，いっしょに三軒ものお店をまわって」くれて，「別れ際に自分のコレクションのエメラルドの原石をプレゼントしてくれた」場合など，ちょっと日本では考えられないことである。この様な結果，「親切に国境はなく，人と人を結ぶのは心だとあらためて」考えさせられ，自己の対人関係における価値と行動様式について目を向けることになるのである[57]。

さて，最後に，イメージ 101 も，カナダという異文化の中でカナダ人の行動様式に触れることにより，自己の行動様式を見直すにいたったものとして，非常に興味深いものである。周りを見渡せば，「コートの人もいれば，半袖のブラウスの人もいる。」このような環境も日本では見かけないものなので，カナダでは否応なしに目に入ってくるのである。カナダ訪問にあたっては，「着物と下駄でと思っていたが人に笑われるのではないかと気をつかい，慣れない靴を履き，痛いのをガマンして歩いて」きたが，そんな行動が「馬鹿らしくなり」，カナダ人は「自分の感覚でおしゃれを楽しんでいる」と感じるようになるのである。（No.101）[58] 自己の「常識」とされている「行動様式」とは異なる人々の行動様式に触れることにより，その時，初めて自己の内部にある「みんなと一緒」という価値と行動様式との存在に気づき，考えることになるのである。

6．パブリック空間におけるイメージの特徴

主たるイメージとその影響について見てきたが，それでは全体的にどのような特徴があるのだろうか。これまで見てきたところから，カナダを訪問した人々は，カナダおよびカナダ人に関して，次のような包括的イメージの持っていると言えよう。

(1) まず，「想像を絶した」圧倒的で雄大な自然の存在。しかし，その自然は「手つかずのまま」の自然ではなく，「ゴミ一つ落ちていない」と言う

言葉に象徴されるように，「よく管理された」自然であり，「自然保護」がなされ動物との共生も図られている。その大自然の中で，家族そろって休暇を楽しむのが，カナダ流生活様式である。

(2) 都市の景観には，「都市を計画していく意志」が表れている。広くてゴミのない道路，家々の庭には柵がなく，緑の芝生が空間に広がっており，街全体が公園のようである。電柱も電線も見られず，看板すらも風景との調和が図られている。そこには，「公共の意志」ともいうべき存在が感じられるのである。

(3) 天然ガスが吹き出して燃えている光景が象徴的に示しているように，資源は豊富である。しかし，街には余計な街灯は点灯してはおらず，無駄な使い方はしてはいない。様々な分野で，このような生活様式が見られる。店や家の外観は質素なのが多いし，「古い」ナイフやフォークの類でも実用品として売買されている。買い物をした時の包装紙も不必要な使い方はしない。堅実な生活様式が現れている。

(4) 「無駄はしない」ことと関連して，「合理的」な側面も，生活のあるゆる分野にまたがって見られることである。赤信号でも，小回りの右回りは可能ということに象徴されている。また，レストランでの領収書のチェックは，「注文した物」のみ支払うということで，まさに「理にかなっている」行動様式である。

(5) 人柄については，知らない人にでも，気軽に声をかけ，案内までしてくれることもあり，非常に親切である。しかし，レストランでは，静かに並んで待ち，大らかな様子が窺える。そんな飼い主に飼われる犬も大人しい性格が見て取れる。しかし，自主的で，自分の感覚でオシャレを楽しむ人達でもある。

(6) そして，街のアチコチに揚がっている国旗から，誰もが国を愛している様子を窺い知ることができる。

以上のようなイメージが，パブリック空間での接触から形成されたイメージであり，かなり生活様式や価値観にまで関連するものも多くあり，訪問者たちのカナダ社会に対する興味と関心度の高さが現れているものと

思われる。そして，「追加イメージ」の箇所でも見たように，カナダに関する多くの肯定的イメージと情報が得られている。まさに，刺激的な Learning Process であると言っても良いだろう。

注

1）『北海道新聞』夕刊，1997年4月15日，2ページ。
2）『北海道新聞』，1997年8月14日，22ページ。
3）『北海道新聞』，1997年5月30日，29ページ。
4）「道や国の国際化というPRがあり，知っていましたが，まさかウチまで波及するということは考えていなかった。」との発言が上富良野町でのインタビューで聞かれたし，陸別町の町長自身も，同様の趣旨の事を述べている。陸別町「昭和61年度町民海外研修報告書」1986年。
5）カナダとの姉妹都市提携数は，日本全国で59件あり，そのうちの23件が北海道との姉妹都市提携である（1997年9月1日現在）。財団法人自治体国際化協会『姉妹自治体の活動概況1996』1996，財団法人自治体国際化協会「提携基礎数値（1997年9月1日現在）」，北海道カナダ協会『北海道・カナダ姉妹都市交流』1996。
6）日本全国の姉妹提携自治体は，1,249件（合同提携7件/27町11村を含む）に達している。（1997年9月1日現在）財団法人自治体国際化協会「提携基礎数値（1997年9月1日現在）」。
7）姉妹都市関係は，次の文献に見られるように，一般的に国際化，国際交流，地域活性化などの文脈の中で取り扱われることが多い。長洲一二，坂本義和編著『自治体の国際交流』学陽書房，1983年，伊藤善一・水谷三公・渡戸一郎編著『自治体の国際化政策と地域活性化』学陽書房，1988年，自治大臣官房企画室監修『自治体国際化戦略データファイル』第一法規，1989年，公務職員研修協会編集部『地域・自治体－国際化の可能性』（地方自治職員研修）公務職員研修協会，1988年。
8）鹿追町『鹿追町北方圏視察研修報告書』1982年，28ページ。
9）日本経営協会『海外姉妹都市制度の現状と展望に関する調査報告書』1987年。
10）井上真蔵「国際化の一側面－北海道とカナダとの姉妹都市関係について」『北見大学論集』，1993，北海学園大学を参照のこと。

11) 姉妹都市関係における主体は，国境を越える他の主体と比べて，ユニークな特徴を持っている。つまり，一方の極に国家という公的活動の結果として国境を越える外交官や政府の代表があり，その反対の極には私的活動の結果として国境を越える民間企業のビジネスマンや海外旅行者があると考えれば，姉妹都市活動を担う主体は，これらの両極の中間に位置付けられよう。つまり，地方自治体という公的な機関と地域住民という私的な行動主体の協力により行われる，「普通の人々」が関わる活動と言う特徴を持っているのである。

12) 鹿追町『鹿追町北方圏視察研修報告書』1982年，29ページ。地域の代表であるという意識に関しては，次の見解からも窺うことができる。「一つの視察地を見た場合でも，さまざまな職業，立場年齢により見方が全然変わってきそれを更にもう一度皆んなで話し合うことによって色々な発見ができるからです。」鹿追町，前掲，36ページ。「今回の研修に限らずいろいろな旅行，視察研修で自分の目標に沿ってみんなの和を考えその流れにうまく乗っているのだろうかとふと考えるわけなのですが，自分だけについては，それなりの評価はできますが，しかし全体と自分との調和，動きは，果たして評価出来るものなのか，町を出れば海外に出てしまえば，みんな一人ひとりの責任だと考えてしまいずいぶん自分勝手な気がして，これではいけないと思いまた一から始めるつもりで，後半の研修に臨んだことを覚えています。」同上，40ページ。

13) 白老町『姉妹都市提携五周年記念誌』1987年，11－12ページ。

14) 鹿追町，前掲，31ページ。

15) 星野命編『現代のエスプリ ── カルチャー・ショック』至文堂，1980,10－13ページ。その他，カルチャー・ショックについては，近藤裕『カルチュア・ショックの心理』，創元社，1986，内山喜久雄他監修『カルチャーショック』同朋舎，1988，荻野恒一，星野命編『カルチュア・ショックと日本人』有斐閣，1983などが参考になる。

16) イメージに関しては，今や古典となっているが，次の書は様々な示唆を与えてくれる。Kenneth E. Boulding, *The Image*, The University of Michigan Press, 1956，大川信明訳『ザ・イメージ』誠信書房，1962。

17) パブリック，オフィシャル，プライベートの順序は，姉妹都市関係がより緊密な関係を持つようになってくる時期的な順序とも一致している。

18) インタビューは，1987年から88年にかけて行ったものであり，なお，1994年8月から10月にかけて，上記の姉妹都市提携先であるバーナビー，リン

ゼイ，ポート・アルバニー，ベンティクトン，ケネル，キャンベルリバー，ロッキーマウンテン，ストーニー・プレイン，カムローズ，ラコームを訪れる機会があり，本稿で抽出した訪問者たちのイメージが「実際どのようなものであるのか」を追体験することが可能となった。また，それぞれの姉妹都市で，関係者ともインタビューの機会を得て，訪問者が相手方に対して抱いたイメージに関しても確認することが可能となった。なお，インタビューに次の方々に協力をいただき感謝申しあげます。北海道庁国際交流課：鈴木良和，高橋寿一，小松昭彦，本堂藤昭；釧路市：須藤高司，西山繁雄；名寄市：桜庭康喜，石王和行，中田一良；函館市：池田英治；網走市：井田勇次，三宅広明；池田町：石井明，石田陸紀；上砂川町：成瀬健一，木村征紀，平野照夫，前田厚；白老町：見野全，千石講平，青山照；石狩町：宮森正人；上川町：佐々木直司；鹿追町：岡野友行，安田直人，川染洋，堀川昌広，坂口治男，飯沼啓子；上富良野町：酒匂佑一，高橋英勝；陸別町：杉田稔，佐久間幹夫，中野俊夫，佐々木俊昭，空井猛寿（敬称は省略）。

19) 陸別でのインタビュー，鹿追町『第2回鹿追町北方圏視察研修報告書』1984年，35ページ，鹿追町『第1回』，39ページ。
20) 鹿追町『第1回』，48ページ。
21) 鹿追町『第2回』，68ページ。
22) 鹿追町『第3回鹿追町北方圏視察研修報告書』1986年，103ページ。
23) 鹿追町『第2回』，29ページ。
24) 上川町でのインタビュー。
25) 陸別町でのインタビュー。
26) 鹿追町『第2回』，55ページ。
27) 同上，29ページ。
28) 陸別町『昭和61年度町民海外研修報告書』1986年，12ページ。
29) 鹿追町『第2回』，44ページ。
30) 鹿追町『第1回』，79ページ，74ページ。
31) 同上，44ページ，上砂川町でのインタビュー。
32) 網走市でのインタビュー。
33) 名寄市でのインタビュー，陸別町，前掲書，40－41ページ。
34) 名寄市でのインタビュー。
35) 同上。
36) 鹿追町『第1回』，63ページ，45ページ。

37) 鹿追町『第3回』，9－10ページ。
38) 名寄市でのインタビュー。
39) 鹿追町『第2回』，16ページ，名寄市でのインタビュー。
40) 鹿追町『第1回』，23ページ，51ページ。
41) 同上，53ページ，48ページ。
42) 函館市でのインタビュー。
43) 名寄市でのインタビュー。
44) 同上。
45) 函館市でのインタビュー。
46) 陸別町，前掲書，29ページ。
47)「広報かみかわ」86年11月，6ページ，上砂川町でのインタビュー，陸別町，前掲書，44ページ。
48) 陸別町，前掲，40－41ページ。
49) 池田町でのインタビュー，石狩町でのインタビュー。
50) 上富良野町でのインタビュー，網走市でのインタビュー。
51) 名寄市でのインタビュー。
52) 鹿追町『第2回』16ページ。
53) 鹿追町『第2回』44ページ，54ページ。上砂川でのインタビュー。
54) 鹿追町『第2回』，56ページ。
55) 上砂川でのインタビュー，鹿追町『第1回』48ページ。
56) 鹿追町『第1回』，63ページ。
57) 同上，37－38ページ。カナダでもトロントのような大都会の町中では考えられないことだが，エドモントンのようなかなり大きな都市でも，ここで触れたようなカナダ人の行動は，筆者の経験からも十分に考えられることである。
58) 同上，49ページ。

IMAGES OF CANADA
— Visiting Canadian Twin Cities — (1)

Shinzo INOUYE

Summary

There are twenty-three cities and towns in Hokkaido which have been twinned with their Canadian counterparts. So, many people in Hokkaido have visited their twin cities and towns in Canada. Visiting their twins in Canada provides them with a number of direct cross-cultural contacts with various acpects of Canada and Canadian people.

This paper examines how such cross-cultural contacts affect the people's existing images of Canada and Canadians as well as their self-images, and what kind of "new" images are added. We extracted people's images from the visitors' reports and the interviews conducted in thirteen towns and cities in Hokkaido, and classified these images into three categories, i.e., the images of the "public" environment, which is accessible to everyone, including tourists; the images of the "official" environment, which is concerned with official ceremonies and activities, accessible only to the visitors from twin cities; and the images of the "private" environment, which enables these visitors to stay with their Canadian host families and to get in touch with various facets of Canadian life.

Examining 118 images in the "public" environment, Part I points out in what way the contacts in this field affected and modified visitors' images, and that they added a great number of "new" images, which would help them form more accurate images about Canada. It also points out that many images are concerned with visitors' attempts to observe not only superficial aspects but also "hidden aspects" of

Canadian way of doing things, and that some images affected visitors' self-images and values to such an extent to which they changed their pattern of behaviour.